

令和5年度・令和6年度「ちばっ子の学び変革」推進事業研究成果報告書

木更津市立木更津第一中学校

研究主題

自己の考えを深め、表現できる生徒の育成（工夫した学級集団づくりや授業づくりを通して）

1 学校の概要

本校の学区は、木更津駅を中心にして県木更津袖ヶ浦線（一般県道270号）までの駅東部商店街、西側の海岸線までの本町商店街、南部は矢那川、北部は中里までの住宅街が学区である。

昭和45年頃から55年にかけて、学区外に清見台団地、シーアイタウン、八幡台団地などが次々に造成された。それに伴って、ドーナツ化現象を呈したため昭和56年度に学区の再編成が行われ、朝日2、3丁目、長須賀が学区に編入された。それまでの学区は木更津第一小学校のみであったが、この再編成により西清小学校が加わり、現在2校の小学校から本校に入学している。

保護者の学校教育に関する関心は高く、学校安全ボランティアなど学校教育活動に対しても協力的である。

2 研究の概要

（1）児童生徒の実態と課題

全国学力・学習状況調査の結果から国語科や数学科に対する意欲が全国平均よりも低い結果となっている。国語科では、「適切な漢字の意味を選択する問題」や「古文の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す問題」の平均正答率が県や全国よりも上回っている。この結果は、国語科として授業開始時に漢字練習を行ったり、古文の読む練習を繰り返し行ったりした成果が出ていると考える。しかし、記述式の問題については、県や国よりも低い結果となってしまった。特に、自分の知識と経験と結びつけながら文章を書くことに課題があった。

本校の生徒は、自分の考えを持ち、意見を書いたり、話したりする表現力に課題がある。そのため全教科を通して、表現力を高める指導、手立てを講じていく。国語科では、読解力の向上と読みとった内容を自分の知識や経験と結びつけて書くことができるように指導していく。

（2）学力向上のための取組

【全体での取組】

・全国学力・学習状況調査の問題や結果の分析

→全国学力・学習状況調査の問題や結果を全教科で分析し、課題把握を行い、課題解決策（表現力の向上）について検討をおこなった。昨年度は教科主任を中心に分析を行ったが、今年度は全職員で検討を行った。

・『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラムの活用

→『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラムの指導過程に沿った授業実践を全教科で実践している。特に「まとめあげる」の過程については、生徒が自分の言葉で書けるよう、取り組んでいる。

- ・ICT機器の活用

→お互いの意見を共有し、意見交換をスムーズに行うためにタブレットを活用している。また、発表をする時に、視覚的にも伝えやすくするために、スライドショー等の活用を行っている。

【国語科】

- ・全学年で作文指導の実施

→200字程度の作文（テーマを決めた意見文など）を月に1～2枚のペースで取り組ませ、指導者による添削や、生徒間での相互評価の機会を設けている。最初は書き方がわからなかったり、書くのに時間がかかったりする生徒もいたが、練習を重ねるにつれて、少しずつ書ける生徒の数は増えてきている。

- ・「漢字練習」の時間の確保

→授業冒頭の5分間を自主学習の時間として位置付け、生徒は自分のペースで学習に取り組めるようにしている。

- ・実践モデルプログラムの「広げ深める」過程の充実

→学習課題に沿って、生徒一人ひとりが解決を図ったり、教師が道筋を示したりするだけでなく、自分の考えを仲間へと伝えたり、仲間の発表から新たな考えに気づいたりする機会を設けることで、表現力が磨かれるように指導している。

- ・ICT機器の効果的活用

→自分の考えを持ち、他者の意見を取り入れることができるように、意図的にICT機器の使用場面を設定し「書く力」「表現力」の向上を図っている。

- ・朝読書の時間を活用

→図書委員が中心となって本の読み聞かせを行っている。この取り組みを通して本の内容をより深く理解し、読書を楽しむことにつながっている。

（3）加配教員（学習サポーターを含む）の活用

学習サポーターは、週1回程度、T2として、生徒の学習支援を行った。国語科では、主に次の三つの場面で、指導や支援を行った。

第一に、T1が一斉指導をしている際に、手が止まっている生徒や話を理解しきれていない生徒がいたら、声掛けなどを行った。

第二に「作文指導と自習支援」である。学習サポーターには、事前に、または授業中に、生徒と同じ言語活動や作文等の課題に取り組んでもらった。それにより、生徒と同じ目線に立ち、的確にアドバイスをしていただくことが多くあった。

第三に「TT（ティームティーチング）」である。TTは、T1の教師と役割分担を行いながら進めた。例えば、T1が教室で全体指導を行った後、課題が速く終わった生徒を対象に、T2として指導を行った。具体的には、図書室での調べ学習やプリント学習等、発展的な内容の学習への支援である。

また、言語活動の一環で作品制作の指導を行う際に、手分けして指導にあたることもあった。生徒にタブレットか紙ベースで作るかを選ばせた後、同じ教室内において、タブレットの生徒にはT1が、紙ベースの生徒にはT2が指導に当たる、という形式である。

【成果】

- ・場所別に、あるいは活動の形式別に手分けをしながら、TTを行った。その結果、T1の教師による個別指導を充実させることができ、生徒も自分のペースで学習を進めることができた。

【課題】

- ・学習サポーターの勤務日と授業の学習内容が合致せず、うまく活用できないことがあった。
- ・T2としての役割が多くなってしまった。より良い活用方法について模索していく必要がある。

3 研究の成果

全職員で生徒の学習課題について共通理解を図り、手立てを共有することで、全教科で表現力を高めるための授業改善をしようとする意識改革をすることができた。特に、全国学力・学習状況調査の問題を全職員で解き、問題や結果の分析、また、全教科で表現力を高めるための手立てを考えることができたことが大きな収穫であった。そして『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラムを全教科で活用することで、表現力を高めるための学習過程を踏まえた授業改善につなげることができた。授業改善をする過程で、教科部会内での意見交換や職員同士の相互授業参観が活発にできたことも大きな成果だと考える。

国語科での共通実践を通して確認することができた生徒の変容については、特に生徒の「書くこと」への意識の変化では、年度当初に抱いていた苦手意識を払拭できた生徒が多くいた。

現在の中学3年生を対象として行ったアンケート結果でも、表現力に関する二つの質問への回答結果を見てみると、「文章を書くことは、日常生活の中で必要か」という設問への肯定的な回答の割合は84.4%、「文章を書く学習は、ほかの教科や総合的な学習の時間などの学習に役立つか」という設問への肯定的な回答の割合は90.6%と、高い数値が確認できた。

実際の生徒の姿を見ていると、課題への取組を重ねていくうちに少しずつ書き慣れていく様子が見られた。そして「書くこと」ができるようになると、人前で「話すこと」の活動にも挑戦する生徒も多くなった。このように、生徒の学習に向かう姿勢にも、前向きな変化が見られていると感じる。

全国学力・学習状況調査における数値の変容はまだ見られないが、継続していくことで数値にも変化が見られていくと考える。

4 今後の課題

主に3つの課題があった。

1つ目は、「書く力」の変容を計る方法の難しさである。特に、全国学力・学習状況調査などを用いて、同一生徒の数値での変容を見取することに困難さがあった。

2つ目は、県学習サポーターの活用方法である。T2としての役割が多くなってしまい、効果的に活用するためには、どのようにすればいいのか、課題が残っている。

3つ目は、全教科、全学級での指導の経過や成果を確認していくことに難しさを感じた。

今後は、この課題の解決方法を模索しながら、生徒の表現力をさらに向上できるように取り組んでいきたい。